

# 埋文群馬

MAIBUNGUNMA



## 埋文群馬No.60 目次

● 最新レポート

金井下新田遺跡 一次々に現れる古墳時代の重要な遺構―

友廣哲也・山中 豊・小野 隆…… 2

金井東裏遺跡 ー「甲を着た古墳人」の冢の詳細調査ー

関 邦…… 5

● いま、地域が見えてくる

石川原遺跡 ー見えてきた上湯原の歴史ー

齊藤利昭・麻生敏隆…… 6

● 資料展示室から

平成 26 年度最新情報展第 3 期「群馬の弥生時代」

大木紳一郎…… 8

● 展示記録

平成 26 年度古墳王国展「古墳人のモノづくりー伝統と新来の技術ー」

長谷川博幸…… 10

● 講演記録

平成 26 年度調査遺跡発表会「金井東裏遺跡と渋川市の古墳時代」

関 晴彦…… 11

揭示板・表紙の写真解説



公益財団法人

群馬県埋蔵文化財調査事業団

<http://www.gunmaibun.org/>

## かないしもしんでん 『金井下新田遺跡』

次々に現れる古墳時代の重要な遺構

調査統括 友廣哲也・主任調査研究員 山中 豊・主任調査研究員 小野 隆

### 1. 平成 26 年度発掘調査成果の概要

金井下新田遺跡は、国道353号金井バイパス(上信自動車道)建設工事に伴い、群馬県渋川土木事務所からの委託を受けて、平成26年4月に発掘調査を開始しました。今年度の調査では、6世紀初頭の榛名山噴火に伴う火山灰と火砕流堆積物に覆われた、全国的にも注目される発見が相次ぎました。5世紀後半の網代垣<sup>あじろがき</sup>を巡らした囲い状遺構、鍛冶遺構、祭祀跡などです。

囲い状遺構では、垣に用いられた網代材を確認できました。垣で囲われた範囲は方形区画と推定していますが、この区画内部には1辺9mを超える大型竪穴住居跡1棟が見つっています。住居跡を埋めた火砕流堆積物の中から、柱材が炭化した状態で出土しました。

榛名山の噴火で一面に降り積もった火山灰の上



写真1 囲い状遺構の北東に残る人の足跡と馬の蹄跡  
(黄色矢印が馬と馬引き、白色矢印が大勢の人の進行方向です。)

を避難した人々の足跡も数多く見つかりました。足跡のほとんどは裸足で、中には足の指の一本一本まではっきりとわかるものもありました。その中に馬を引いた人の足跡と馬の蹄跡が、並んで確認されたことは珍しい発見です。さらに、足跡の追跡から、馬引きと馬は多くの人々とは途中で別れ、別方向へ進んでいることも判明しました(写真1)。

### 【同じ火砕流で覆われた二つの遺跡】

金井下新田遺跡では隣接の金井東裏遺跡と同じ状況で、榛名山噴火の被害を受けていることがわかりました。金井東裏遺跡の「甲を着た古墳人」の命を奪った火砕流は、鍛冶工房や網代垣とその内側にあった大型竪穴住居を襲い、避難する人々の足跡や馬の蹄跡を覆い尽くしました。

榛名山の噴火に伴う厚さ約2～3mに及ぶ火山灰や軽石で厚く覆われたことで、二つの遺跡は同じ時間を生きていた人々の痕跡を残すタイムカプセルとなりました。甲を着たリーダー的人物、畠を耕す農民、馬飼い、鍛冶工房の鉄器職人等がこの地域にいたことがわかります。さらに、榛名山の噴火から避難する人々の様子を、ダイナミックに現代に伝えてくれています。

### 【5世紀後半の様子を示す金井遺跡群】

金井東裏遺跡、金井下新田遺跡は一連の遺跡と考えるのも良いと思います。いわば金井遺跡群です。例えば、金井東裏遺跡で発見された<sup>けんびしがた</sup>杏葉<sup>ぎょうよう</sup>と呼ばれる馬具や馬の蹄跡と、金井下新田遺跡の馬引きの足跡と馬の蹄跡からは、ここで馬が飼育されていたことが想定できます。日本に馬が伝来したのは、4世紀末か5世紀とされていますが、5世紀代後半には金井下新田遺跡、金井東裏遺跡に、大陸から伝わった馬の飼育・調教等の技術、馬具の知識等が定着していたと考えられます。金井東裏遺跡の古墳に朝鮮半島系の大刀や鉄器が副葬されていたことも、朝鮮半島との交流を明確に証明しています。

二つの遺跡の発掘調査から、今まで分らなかった事が次々に見えてきました。平成27年度も発掘調査は継続して実施する予定です。新たな発見への期待に胸が膨らみます。(友廣哲也)

## 2. 囲い状遺構

6世紀初頭の様名山の噴火に伴う火砕流によって倒壊した「囲い状遺構」の垣を検出しました。「囲い状遺構」を表現した「囲形埴輪」は、これまでも伊勢崎市の赤堀茶白山古墳をはじめとして5世紀代の大型古墳から発見されており、内部には家や導水施設の埴輪などが置かれていたことから、「囲い状遺構」は祭祀・儀礼などが行われた神聖で重要な空間を画する施設と考えられています。ところが、発掘調査で「囲い状遺構」を確認できたのは、これまでのところ秋津遺跡(奈良県御所市)の「方形区画施設」などごく少数しかなく、今回の発見は、全国的にも貴重なものといえます。金井下新田遺跡の囲いは方形に巡るものと推定でき、今回検出した部分はその北東隅にあたります。この隅の東辺部の内側には平面がL字形に曲がる溝で区画された場所があり、外からの道が続いていることから、ここが囲い内部への入口になります(写真1)。



写真1 囲い状遺構全景(東上空から)  
写真の下部には白線で囲んだ多くの足跡があり、この範囲が当時の道であったことがわかります。

### 【火砕流の中から現れた網代垣】

囲いの構造は幅が約20cmの溝の中に角材の柱を立て、これに植物の茎を編んだ網代を用いて壁面とした「網代垣」であることがわかりました。柱や網代、横棧が火砕流堆積物の中に炭化した状態で良好に残っていました。垣の構造までわかったのは、日本では初めてのことで、全国から注目されています。

炭化した垣の用材を慎重に露出させた結果、火砕流によって東辺の垣は東へ、北辺の垣は南へ倒れていることがわかりました(写真1)。さらに、垣の炭化材の下の火砕流堆積物を詳細に観察した結果、東辺垣の方が先に倒れたことが判明しまし

た。垣のほとんどは倒れた状態でしたが、北東隅で柱と網代の一部が立った状態で残っていて、遺構復元の大きな手がかりとなりました(写真2)。



写真2 立った状態で出土した柱と網代(左:北から 右:西から)

垣の部分の詳細な構造については、現在調査結果を分析中ですが、網代には地面に対して斜めに編み込んだ斜格子の部分と、地面に垂直と平行に編み込んだ正格子の部分がありました。これまでの調査からは、囲いの入り口部では、複数の垣が倒れて重なり合っているために網代も重層して発見されていますが、その他では、複数の網代が重なり合っている様子は見られませんでしたので、垣は1面の網代で造ることが基本だったようです。但し、全ての網代が同じ編み込みではなく、正格子のみ、斜格子のみ、斜格子と正格子を組み合わせた網代の3種がありました。



写真3 囲い状遺構の溝と柱穴(北から)

倒壊した網代を取り上げ、垣の溝と柱穴を検出しました(写真3)。溝の中には北東隅からほぼ1.8m間隔で北辺7カ所、東辺6カ所、隅1カ所の計14カ所の柱穴がありました。控柱は垣の柱の外側約0.8mの位置にあって、垣の柱一本おきに3.6m間隔で、北辺、東辺に各3カ所、隅に1カ所の計7カ所の柱穴がありました。

柱穴や入り口部分の構造等について現在調査を進めています。今後の調査で更に明らかにしていきたいと考えています。(山中 豊)

### 3. 囲い状遺構の内部の大型竪穴住居跡

大型の竪穴住居跡は囲い状遺構の内側にあって、6世紀初頭の榛名山噴火に伴う火砕流堆積物で埋没していました。この住居跡の東壁と、囲い状遺構の東垣の方位は、ほぼ一致します。さらに、火砕流堆積物の埋没状況から判断して、両者は同時期に存在していた可能性が高く、大型竪穴住居は囲い状遺構の内部施設と考えられます。

大型竪穴住居跡は一辺約9mの方形で、床面から周堤頂部までの高さは約1.6mありました。炭化した柱材が5本発見され(写真1)、最も保存状態が良かった北西の柱材は、太さが約20cm、長さが約1mで、他の材を組み合わせるための突起である「ほぞ」が残っていました。柱材5本のうち1本は直立した状態で発見され、4本は火砕流により東側に倒れていました。周堤頂部までの高さを考えて柱の長さを復元すると、床面からの長さは約2mだったと推測できます。

住居の東壁に、大型のカマドが造られ、周辺から甕や甑、その他数点の土器がみつかりました。貯蔵穴もあり、住居としての機能を備えていました。



写真1 大型竪穴住居跡柱材出土状況(北西から)

#### 【住居跡と柱材の検出方法】

遺跡の周辺は古墳時代に榛名山の2回の噴火によって被害を受けた地域です。表土の下には厚さ2m程の榛名二ツ岳伊香保テフラ(以下「FP」と略す。)が堆積し、さらに、その下には榛名二ツ岳渋川テフラ(以下「FA」と略す。)の堆積層が30cm程あります。金井下新田遺跡で確認できる主なFAは、最も古い火山灰1層とその後の火砕流堆積物3層の、合計4層となります。

まず、FPを取り除くと、10m四方の高まりが

現れました。大型竪穴住居跡の周堤と思われる高まりです(写真2)。周辺よりかなり盛り上がっていて、この時点で大型の住居跡であると推定できました。住居内に堆積しているFAの中の二番目の火砕流堆積物の上面を精査すると、FPが入り込んだ直径40cmほどの穴が見つかりました。そこで、この穴を50cmほど掘り下げると、炭化した柱材が現れました。穴に見えたのは南東の柱の痕跡だったのです。他の4本の柱材も同じ火砕流堆積層から出土していますが、柱によって検出時の傾きが異なるのは、同じ竪穴住居内であっても火砕流の流れや堆積の仕方が一様ではなく、それぞれの柱の受ける外圧の差が原因と考えられます。

また、一番目の火砕流堆積物層からは、炭化した柱材に直交するかのよう、溝が数条確認されました。後から押し寄せた二番目の火砕流堆積物層が混入し、変色していたために溝としましたが、その後の検証の結果、建物の桁や梁材が落ちた痕跡であると考えられます。梁などの炭化材は存在していませんでした。



写真2 大型竪穴住居の周堤の高まりの検出

#### 【榛名山噴火時の大型竪穴住居】

大型竪穴住居跡の壁際や床面中央部には、周堤からの崩落土が堆積し、その上の床面全体をFAの火山灰層が覆っていました。このことから、榛名山が噴火した時には住居に屋根は無く、柱と梁などの骨組みだけだったと推定できます。

平成27年度は住居の西に隣接する区画を発掘調査する予定です。それにより、住居跡の全貌が明らかになりますので、大型竪穴住居の総合的検証は次年度以降となります。(小野 隆)

かないひがしうら  
『金井東裏遺跡』

「甲を着た古墳人」の胃かぶとの詳細調査

補佐(総括) 関 邦一

金井東裏遺跡で発見された1号人骨(「甲を着た古墳人」)、3号人骨(「首飾りの古墳人」)、2号甲、及び鉄矛は、平成25年度以降に詳細調査を行ってきました。その過程で「甲を着た古墳人」の頭骨の下に鉄製品があることが確認され、平成25年9月に行ったX線CTスキャン調査によって、それが「横矧板鉾留衝角付胃よこはぎいたびょうどめしょうかくつきかぶと」であることがわかりました。錆の部分だけを抽出して緑色で表したX線CTスキャン画像からは、底の部分が船のへさき(衝角)に似た形で、本体は鉄板を横方向に並べて鉾留めされ、下縁部に頬と首筋を保護するための小札製の頬当こざねと鑿ほおあてが装着されている胃の形状がよくわかりました(写真1)。

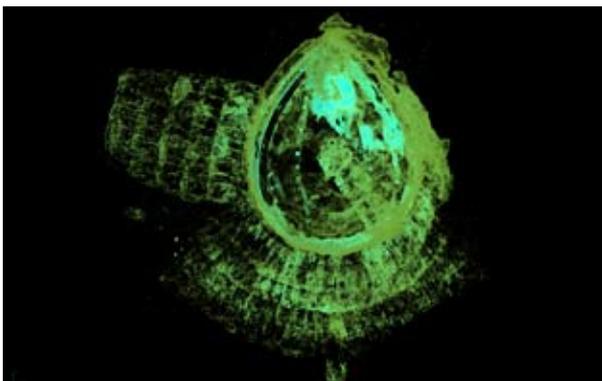


写真1 胃のX線CTスキャン画像

胃の真上には「甲を着た古墳人」の頭骨がのったような状態だったので、胃は頭骨とともに一旦は九州大学へ移され、頭骨の調査が進められていましたが、平成26年9月に頭骨から分離された胃は群馬に戻ってきて、いよいよ胃の調査が始まりました。

箆や筆を使って、胃の表面を覆っていた火山灰を、薄皮を一枚一枚剥すように慎重に取り除いて行くと、ようやく胃の全貌が現れました。

矧ぎあわせた鉄板を鉾により半球形に留めた胃本体の遺存状態は良好で、表面の錆の下には、かなり広い範囲で鉄が残っていました。これに対して薄く小さな小札を紐等で綴って作られている頬当と鑿は劣化が進行し、錆の塊となっていることがわかりました(写真2・3)。

さらに、注意すべき事実も判明しました。この



写真2 胃の現状(上面)



写真3 胃の現状(右側面)

胃にはおびただしい量の紐や布等の痕跡が確認されたのです。

出土品の場合、有機質のために通常はほとんど腐ってなくなってしまう小札を綴りあわせる紐が、繊維に浸み込んだ鉄錆の固まりとして化石のようにその形状を残していたのです。改めてCTスキャン画像を見ると、小札の連結部に紐らしい影が映っています。

実際に紐などが残っている可能性のある部分では、筆で火山灰を掃き落とすようにして、胃の露出作業を進めましたが、茶褐色の錆と化した繊維が姿を現した時は、大きな喜びを感じました。布は首筋を守る鑿の下縁の部位に、その痕跡が認められますが、まだ全貌は見えていません。

詳細調査は現在も進行中です。今後は、可能な限り紐や布の痕跡を明らかにして、布の織り方を解明するとともに、胃の製作技法の復元を目指したいと考えています。

## いしかわら 『石川原遺跡』

### 見えてきた上湯原の歴史

上席専門員・調査統括 齊藤利昭・上席専門員 麻生敏隆

#### 1. はじめに

石川原遺跡は八ッ場ダム建設工事に伴い国土交通省から委託を受けて発掘調査を実施しました。吾妻郡長野原町大字川原湯字上湯原にあり、平成20年度に引き続き、平成26年4月から調査を再開しました。遺跡はJR吾妻線の旧川原湯温泉駅から約2km西、吾妻川右岸の舌状に張り出した下位段丘面上に位置し、標高は536～532mです。今年度はこの舌状台地の北東部の約25,000㎡を調査対象としました(写真1)。



写真1 石川原遺跡の遠景(西の不動大橋から望む)

#### 2. 甦る江戸の川原湯村

第1面は天明3(1783)年の浅間山の大噴火に伴う泥流層(天明泥流)直下面の調査で、北の吾妻川に向かって緩やかに傾斜する地形のほぼ全面に畑が広がっています。畑は細長く区画され、その中にリング状の円形平坦面がいくつも認められ、さ



写真2 ほぼ全面に広がる畑

らに特徴のある「丸に一」の刀の鏝のような形をしたものも5基検出しました(写真2)。

泥流は2mを超す巨礫をはじめ大小の礫が入り混じっていました。ここは吾妻川右岸の崖に面しており、東流していた吾妻川が対岸の天狗山の山塊に当たり南東に流れを変える場所です。そのため、天明泥流の流れも変化していたようで、畑には礫が挟り込んだ流線形の凹面が多く見られ、中には30cm以上の大礫がめり込んだものもあって、ダメージの凄さに驚かされました。

今回の調査地東端の1,000㎡ほどの範囲に、切り石で囲われた屋敷区画や、前面に切り石の石敷きや礎石が配置された建物や、建物の南西で築山や中島を持つ瓢箪形の池が配置される庭園遺構を確認しました。この建物群は、天明3年の泥流災害記録に記載があるものの、所在地不明となっていた「不動院」の可能性が強い遺構です(写真3)。



写真3 「不動院」の可能性のある寺院跡

また、寺院跡の西100m程の所で、周囲の畑面より30cm前後掘り窪められ、その南辺と西辺を石垣に囲まれた建物跡を検出しました。周囲から数点の石造物も出土していることから、今は西の高台に鎮座する「不動堂」の可能性もあります。その他に「不動の滝」方面から東西に延びる、当地区の幹線道や水路と考えられる遺構が見つかりました。特に、寺院と西の建物を結ぶ間では、2～3mの幅で30cmほど掘り窪められており、南側に石垣が積まれ、ここに幅1m程の道と部分的に石組のある水路が並走していました。

### 3. 中近世の集落と畑作

第2・3面は天明泥流埋没畑の下層で、南の山地から流出した土砂により埋没した畑が2層確認できました。このことから、中世から近世以後も畑作がこの地で広く行われていたことがうかがえます。第1面の天明3年の浅間山噴火に伴う泥流に覆われた畑は、畝間の間隔や作物の痕跡から麻畑と推定されるのに対して、第2面の畑の畝間は広いことから他の作物と考えられます。

調査地中央の吾妻川寄りでは、畑以外に近世から中世にかけての掘立柱建物群と土坑・柱穴群を検出しました。土層切り合い関係から土坑が古く、15棟の掘立柱建物群が新しいことが分かりました(写真4)。この他には洪水層を掘り返した畑や、200基近い土坑群、700基を超える柱穴群などがあります。また、人骨や歯、古銭などが出土した7基の墓跡も検出しました。土坑群には、農作物貯蔵用と考えられる細長い土坑(イモ穴)が多く含まれます。なお、柱穴群には、掘立柱建物の柱穴として組めそうなものも多数あり、更に掘立柱建物の軒数は増える可能性があります。



写真4 掘立柱建物群と墓などの土坑



写真5 近世から中世にかけての畑

### 4. 平安時代の竪穴住居跡と陥し穴

第4面は第3面の畑の下、南の山の山体崩壊による2次堆積ローム上面で、平安時代の竪穴住居跡1軒と、陥し穴38基を検出しました。竪穴住居跡は東壁のほぼ中央にかまどを設け、南東隅の壁際に貯蔵穴を掘り込んでいます。陥し穴は、住居を取り囲むように配置されていました。長さ2m前後、幅1m前後、深さ1m程の小判形をしています。住居を守るためか、狩猟の場として利用されていたかは今後の検討となります。



写真6 平安時代の竪穴住居跡 (西から)



写真7 平安時代の陥し穴

### 5. まとめ

今年度の発掘調査で検出したより古い時代の遺構は、縄文時代の後期の埋設土器1基のみでした。

以上のことから、この地域の土地利用は、大きく①平安時代の集落(竪穴住居跡・陥し穴)→②中近世の畑(土坑群)→③中近世の集落(掘立柱建物群)→④近世の畑→⑤天明3年泥流で埋没した屋敷(寺院)と麻畑の5時期に区分できました。

本遺跡の調査は次年度も継続して実施する予定です。特に、確認のみでとどめた「不動院」「不動堂」は今後の本格的な調査によって、その規模と構造に関する正確な情報が得られるものと期待しています。江戸時代後半の寺院の研究にとって貴重な資料を提供する調査になると考えられます。

## 『群馬の弥生時代』

事業局長 大木紳一郎

5月17日（日）まで、発掘情報館2階の資料展示室で「群馬の弥生時代」の展示を開催しています。実物の土器・石器・青銅器・鉄器が、群馬県の弥生時代を語ります。

## 1. はじめに

弥生時代は、自然と共生した縄文社会から農耕文化を受け容れて統一国家の基盤を築くまでの、激動の時代でした。農耕技術や社会形成において西日本が早くに変化を遂げたことに比べて、東日本ではやや遅れたようです。それでも地理的条件や縄文文化の伝統に根ざした東日本独自の弥生文化が生まれ、やがて時代の大きな流れに呑み込まれるように変化していった歴史がありました。

群馬の地は、列島中央の内陸にあって、東西を結ぶ結節点に位置します。この地理的位置が群馬独自といってもよい弥生文化時代の流れをつくっていったのです。

## 2. 弥生土器の変化

群馬の弥生土器は、紀元前5世紀頃の東海地方からの弥生土器の到来に始まり、在来の縄文土器と融合することで独自の発展をとげました。その後、弥生時代中頃にあたる紀元前1世紀頃に長野県から波及した櫛描文土器に転換したのが二度目の大きな変革でした。これは、長野県の地名をとって「栗林式土器」と呼ばれます(写真1)。栗林式土器は上信境の峠を越えて、またたく間に群馬に広がり、さらに埼玉県北部にまで達しました。

続いて、紀元後1世紀の弥生時代後期に入っても、長野県の櫛描文土器とそっくりな土器が使

れます。弥生土器でみれば、群馬の弥生時代中頃から後半は長野県と密接なつながりのあったことは疑いのないところです。そして、これが群馬弥生文化を大きく特徴づけることになるのです。

## 3. 農耕社会の変革

群馬に最初の弥生文化が伝えられたとき、稲作だけでなくアワ・キビ・マメ類の栽培も一緒だった可能性があります。群馬での証拠はまだ不明確ですが、同じ頃の長野県や神奈川県では、イネ以外にもこのような雑穀類が発見されています。群馬でも、中期前半までの遺跡は乾いた台地の上に多く、畑を耕すのに適した石鍬を使って多種類の作物を作っていたと考えられます。近くの湿地ではイネ栽培も行われていたと考えてよいでしょう。この頃の弥生集落の実態はよく分かっていませんが、小規模で長期に定着することなく、一定期間で移動を繰り返していたと考えられています。

ところが、紀元前1世紀頃の中期後半になると、数十軒以上の住居で構成された集落が、低湿地に面した場所を選んで営まれるようになります。このことから、当時の弥生人が水田経営を生活の基盤に置き始めたと考えられます。高崎市新保遺跡のように後期末まで300年近くも継続した弥生集落は、水田稲作に成功し長期定住を可能にした証拠と言えます。渋川市の有馬条里遺跡では、イネのほかにアズキやダイズが発見されているので、水田稲作を主体としながらも畑作とセットになった農耕であったと考えてよいでしょう。

## 4. 長野県地域との交流

死者を葬る墓の形が大きく変わるのが、やはり中期後半の時期でした。それまでは、土器の骨壺に骨の一部を納めて地中に埋める「再葬墓」が主流でしたが、この時期から棺に直接遺体を葬る「木棺墓」が採用されます。

渋川市有馬遺跡の「礫床墓」は、この木棺の下に小石を敷き、まわりに大きめの石を積み上げた構



写真1 栗林式土器のセット（前橋市清里庚申塚遺跡）



写真2 溝で囲まれた木棺礫床墓（渋川市有馬遺跡）

造で、もともと長野県北部の墓制だったことが分かっています(写真2)。また、溝で四方を囲む「方形周溝墓」もこの頃から次第に見られるようになります。

一般に死者を葬る方法は伝統が根強く、これを変えるのは社会的に大きな変化があったと考えざるを得ません。墓制が変化した時期は、長野県地域から群馬の地に栗林式土器が波及したのとほぼ同時であることから、栗林式土器を使う弥生人たちが集団で移住した結果だという説が有力になってきています。

中期後半から長野県地域の弥生集団と非常に密接な関係が生まれたことは間違いありません。互いの集団同士の交流はもちろん、文物の交易や様々な情報交換も活発になったことでしょう。中国や朝鮮半島からの先進的技術や金属器の流入も、西日本から長野県北部地域を経由したルートが主体であったと考えられます。

鉄器は優れた利器としての力を発揮し、弥生社会の増強や発展の原動力になったと考えられますが、当時の日本では原料からの鉄生産は技術的に困難で、もっぱら

外来品でまかかっていました。渋川市有馬遺跡では鉄製の剣や腕輪、安中市長谷津遺跡では鉄剣や鉄斧が発見されています(写真3)。また、鉄の鎌は県内各地の弥生遺跡から見つかっています。これらの多くは、鉄器の供給拠点と推測され



写真3 鉄斧  
(長さ12cm安中市長谷津遺跡)

る西の日本海沿岸から長野経由でもたらされたものではないでしょうか。

他地域との交流からは、日本列島内の世情についても知ることができたはずですが、『魏志倭人伝』に記載された倭国内での「クニ」同士の戦争が事実ならば、群馬の弥生人にとっても無関心ではいらなかったでしょう。

## 5. 弥生地域社会の成り行き

紀元1世紀の弥生後期になると、大きな集落といくつもの小規模な集落で構成されるムラのまとまりが各地に見られるようになります。その多くは、吾妻川・碓氷川・鐺川・烏川・利根川等の大きな河川の流域沿いや、中小河川が密集して流れる微高地に分布しています。

各地域の弥生社会では、例えば産地が限られた石材による石器を作るムラのように特別な役割をもつ集団がいたようです。その他、交易を主とするムラ、地域の監視的役割を与えられたムラの存在も想定できます。富岡市の国指定史跡中高瀬<sup>なかたかせ</sup>観音山遺跡は、周辺より50m以上も高い独立丘の頂上にある集落です(写真4)。ここからは、同時期の集落群が分布する富岡市街を中心とした地域を一望することができ、当時の幹線ルートでもある鐺川沿いにあることから、この地域の監視といった役割を担っていた可能性が考えられます。



写真4 中高瀬観音山遺跡の立地する丘陵（北から）

紀元3世紀の後半ころ、群馬の弥生社会は突然といってよいほどの終焉をむかえます。東日本規模といえる東海西部からの集団移住がその大きな要因だったようです。これが群馬における古墳時代のスタートとなりました。

自立的発展の一方で、西方からの集団移動が大きな画期となって変転した群馬の弥生時代の象徴的な最後の姿かもしれません。

## 『古墳人のモノづくり』

### 伝統と新来の技術

主任調査研究員 長谷川博幸

平成24年度に始まった古墳情報発信事業は、群馬県教育委員会からの委託を受けて実施しています。その中の「古墳王国展」は群馬県の古墳文化の豊かさを広く県民に理解していただくことを目的として開催してきています。

平成26年度は、渋川市の金井東裏遺跡・金井下新田遺跡の発掘調査成果を基に、古墳人の「モノづくり」に焦点を当て、平成27年2月26日(木)～3月3日(火)まで、群馬県庁1階県民ホールで実施し、5,022人の入場者がありました。



写真1 展示の様子

#### 【古墳人のモノづくり】

古墳人が日常生活で使っていた道具やモノのうち、土師器・埴輪や石製模造品、ガラスは、弥生時代以来の伝統技術のなかで、古墳時代社会の生活道具や祈りの道具としてつくられてきました。

さらに、渡来系の技術がもたらされた結果、鉄の道具づくり、馬の飼育、須恵器づくり、布づくりなどが、5世紀後半から盛んにおこなわれるようになりました。ここでは朝鮮半島から伝わった新来の技術2つについて紹介します。

#### 1 鉄製品をつくる

日本では古墳時代に鉄づくりが始まりました。今から1,500年前の中国地方のことです。

群馬ではまだ鉄素材をつくる技術はなかったので、鉄片を手に入れて武器や農具を鍛造していたと考えられます。それを証明するように、金井下新田遺跡では、5世紀後半の鍛冶炉がみつかりました。一辺10mほどの大型竪穴住居の中央部に設置された粘土を貼り巡らせた鍛冶炉の周辺部からは、送風装置であるフイゴの羽口、熱した鉄を

打ち叩いたときに飛び散った鍛造剥片などが出土していることから、鉄製の鎌・農工具・日常生活道具等がムラの中のこのような工房で作られたと考えられます。



写真2 赤く焼けた鍛冶炉と羽口 (渋川市金井下新田遺跡)



写真3 素環頭大刀柄頭  
(前橋市・伊勢崎市多田山古墳群)



写真4 U字形鋤鋤先  
(高崎市多比良追部野遺跡)

#### 2 須恵器をつくる

5世紀に朝鮮半島から伝わった須恵器作りは、<sup>あな</sup>罏窯や還元焰焼成などの高度な技術を必要としたため、地方での生産はすぐには始まりませんでした。群馬で須恵器が焼かれるようになるのは、6世紀初頭の頃と考えられています。

高崎市井出二子山古墳や前橋市荒砥北三木堂遺跡出土の須恵器は、生産地の窯を特定することはできませんが、群馬で焼かれたものですし、太田市金山丘陵にある窯跡群では、6世紀に須恵器生産が開始されたことがわかっています。近くの太田市大道東遺跡<sup>だいどうひがし</sup>では、須恵器づくり工人達が住んでいたとみられる集落が調査されています。また、同じころには藤岡でも須恵器づくりが行われています。これらの藤岡産の須恵器は前橋市鳥羽遺跡<sup>とりぼ</sup>や、前橋市と伊勢崎市にまたがる多田山古墳群から出土しています。

## 『金井東裏遺跡と渋川市の古墳時代』

専門調査役 関 晴彦

調査遺跡発表会は当事業団自主事業として毎年実施してきています。平成26年度は、渋川市と共催で「金井東裏遺跡と渋川市の古墳時代」と題して、次の通り開催しましたが、地元の市町村との共催は初のことでした。

日時 平成26年10月4日(土)13時～16時20分

場所 渋川市民会館 大ホール

### 【ロビーでの資料展示】

ホールのロビーに、金井東裏遺跡の調査時の写真パネルや遺跡のジオラマ、渋川市教育委員会制作の「甲を着た古墳人」のレプリカや関連遺跡の写真パネルを展示しました(写真1)。



写真1 ロビー展示を見学する参加者

### 【発表内容】

#### ①徳江秀夫

##### 「渋川の古墳時代遺跡群の概要」

二度にわたる榛名山二ツ岳の噴火の様子を、土層断面で示すとともに、これに伴う火山噴出物の分布範囲と、発見された遺跡の位置等と、火山噴出物に埋没した渋川市域の古墳時代の集落や田島、古墳の概要が説明されました。

#### ②元渋川市文化財保護課長石井克己

##### 「黒井峯遺跡の調査-軽石で埋まった古墳時代の農村風景-」

二回目の榛名山二ツ岳噴火に伴う軽石直下で発見された国指定史跡黒井峯遺跡の建物跡や関連施設の様子が説明されました。

#### ③高井佳弘

##### 「白井・吹屋遺跡群の調査-古墳時代の馬の放牧地-」

黒井峯遺跡と同じ軽石下で発見された馬の足跡から推定される馬の放牧地の様子が、調査時のスライド等で説明されました。

#### ④渋川市文化財保護課長小林良光

##### 「中筋遺跡の調査-火山灰と火砕流に襲われたムラ-」

群馬県指定史跡中筋遺跡で発見された竪穴住居や平地式建物が、1回目の噴火に伴う火砕流に襲われ、焼失・埋没した様子が語られ、当時の建物の構築方法や建築部材の樹種などの情報が得られたことが説明されました。

#### ⑤桜岡正信

##### 「金井東裏遺跡の調査-古墳人とその生活空間-」

中筋遺跡と同じく、1回目の榛名山二ツ岳の噴火に伴う噴出物下から発見された、金井東裏遺跡の「甲を着た古墳人」をはじめとする人骨や建物、畠、古墳、祭祀遺構、その他の出土遺物が紹介され、さらに人骨を含む現地の出土状態を周りの土ごと切り取って事業団に持ち帰り、保存処理作業室での詳細調査の内容も紹介されました。それらの事実や現在までの情報に基づき、古墳人の生活空間がどのようなものであったかを推定しました。

### 【講演】

#### 文化庁記念物課 林正憲文化財調査官

##### 「古墳時代遺跡の調査の意義と活用」

「古墳時代」と我々の関わりを時代に沿って解説し、各地の事例の紹介をいただきました。さらに、遺跡の調査・保存・活用は現代生活を充実させるために大きな意義があるとの提言もいただきました。

当日は、県内外から486人の参加者がありました。ホールの展示も熱心に見学され、説明役の職員に対しても様々な質問をされる県民の姿があるなど本遺跡への関心の高さを示していました。



写真2 会場となった渋川市民会館大ホール

# 掲示板

## 普及課からのお知らせ

### 1 平成27年度「調査遺跡発表会」を6月に開催します。

平成26年度に県内で実施された発掘調査の中で、特に注目される遺跡の成果を調査担当者が発表します。

- 開催日 平成27年6月20日(土)
- 時間 午前10時から午後3時まで
- 会場 前橋テルサ ホール 前橋市千代田町2-5-1
- 内容 当事業団及び県市町村教育委員会が実施した発掘調査の中から、6遺跡の発表を予定しています。
- 参加費 無料です。
- 予約 必要ありません。
- 駐車場 駐車場は市営パーク千代田、市営パーク5番街が無料で利用できます。
- その他 資料代として、実費をいただきます。  
具体的な内容が決まり次第、ホームページなどでお知らせします

### 2 「公開普及デー」を10月に開催します。

平成27年度は隔年で実施している公開普及デーの開催年度にあたります。一日限りの行事ですが、普段は行っていない体験学習や施設公開をしますので、ご家族、お友達でお誘いの上ご来館ください。

- 開催日 平成27年10月10日(土)
- 時間 午前9時から午後4時まで
- 会場 群馬県埋蔵文化財調査センター 渋川市北橋町下箱田784-2
- 内容 各種体験学習。(一部の体験学習では材料費を負担していただくものもあります。)
- 参加費 無料です。
- 予約 必要ありません。
- 駐車場 (1)自家用車での直接来場はできません。  
(2)前橋市関根町の群馬県総合スポーツセンター第2イベント駐車場から、埋蔵文化財調査センターまでの間を、随時無料送迎バスを運行します。
- その他 具体的な内容が決まり次第、ホームページなどでお知らせします。

連絡先:普及課  
☎0279-52-2513

## 表紙解説

### 金井下新田遺跡4・5区で発見された「囲い状遺構」

写真の左上の方角が北になります。囲いの範囲は白色破線のようになる可能性が出てきました。道路を挟んで左上の4区の「くの字」状に見えるものが倒壊した網代垣で、ここが囲い状遺構の北東の隅になります。現時点では囲い状遺構の規模を正確に把握できていませんが、確認できている北辺及び東辺の垣の長さは、12～13mあります。囲いの内部には、右下の5区で方形の大型竪穴住居跡があり、4区では一辺約4mの竪穴状遺構が1か所確認されています。



本誌は、一般向けの埋蔵文化財情報誌です。  
お問い合わせは、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団普及課までお願いします。

「埋文群馬」No.60  
平成27年3月●日発行  
編集・発行 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
〒377-8555 渋川市北橋町下箱田784-2  
☎0279-52-2513  
印刷 上毎印刷工業株式会社